

〔発言者〕 秋月辰一郎

〔発言年月日〕 1959年8月2日

〔生年、被爆地、職業など〕 1916年生まれ。長崎で被爆。医師。

〔内容〕

私たち長崎の人々は長崎の体験を余り語らなさすぎるのである。「こんな体験はありふれた小さなことだ。いや誰でも知っている。いや科学的でない」「表現がまずい」といって語るに臆病である。

私達は大いに語らねばならぬ。今まで語らなさすぎた。語ることは私達の義務である。

〔注〕

『長崎の証言』創刊号に収録された秋月辰一郎のことば。「長崎証言の会（初期は長崎の証言刊行委員会）」は長年に亘り、長崎の独自の証言運動をけん引し、今日に至るまで数多くの被爆体験を収集・出版している。1969年発行のこの創刊号は、その証言運動の嚆矢となった。

（『長崎の証言——戦争と原爆の体験を見つめ証言する長崎の声』「長崎の証言」刊行委員会編、1969年所収）

※「長崎証言の会」発行の雑誌タイトルおよび編者は、以下のように変遷している。

- ・1969～78年『長崎の証言』（長崎の証言刊行委員会編）
- ・1978～81年『季刊長崎の証言』（長崎の証言の会編）
- ・1982～87年『ヒロシマ・ナガサキの証言』（広島証言の会と共編）
- ・1987～『証言—ヒロシマ・ナガサキの声』（広島証言の会と共編）